

食料輸入は地球環境問題

てんぷらうどんは常識的には和食のメニューである。だが以前も書いたように、その材料のほとんどは輸入品だ。うどん玉やてんぷらの衣は小麦。しょうゆは大豆。米国、中国、カナダ、豪州などからの輸入が多い。えびはタイ産だし、細かいところでは七味のゴマや海苔も輸入品。以前は「ネギと水だけが国産」であったが、いまやネギも水も輸入される時代だ。てんぷらうどんは、その原料に関しては無国籍料理になってしまった。

沖大幹さん（東京大学、元地球研）によると、小麦や大豆を生産するにはその二千倍から二千五百倍の重さの水がいる。ざっと計算すると一杯のてんぷらうどんの原料を作るのにどんぶり数百杯から千杯分の水が要る勘定だ。小麦や大豆はほとんどが輸入品だから、てんぷらうどん一杯につきそれだけの水を輸入している事になる。世界の小麦や大豆の産地には、そんなに水が潤沢でない地域が多い。産地では、灌漑水路をひいたり地下水を汲み上げたりして農業をやっている。そしてそれを買っているのが、有り余る水のある日本。水に注目して考えると、わが国の食料輸入は世界の水資源のアンバランスを増長させ、水問題をよりいっそう深刻にしている。

運んだものの重さと距離を掛けた数値が「フードマイレージ」。このマイレージは使う石油の量に比例して大きくなる。日本は無論、世界最大のポイント獲得者だ。石油消費は大気汚染を引き起こすばかりか大気中の二酸化炭素濃度を増大させ、温暖化の原因にもなる。フードマイレージのポイントは、そのまま地球温暖化の不名誉なポイントでもある。

歴史の教えるところでは、半乾燥地で灌漑を不適切に進めると、塩分が土地の表面に溜まり、やがては農業ができなくなる。古代のメソポタミアやシルクロードの楼蘭王国はそうして滅んだという説もある。汲み上げた地下水で農業をしているところでは、地下水そのものの枯渇や、肥料や農業による水質汚染が深刻になりつつある。少し大げさだが、一杯のてんぷらうどんが世界の半乾燥地の砂漠化を引き起こすのだ。そのうち日本向けに農産物を作る地域はどんどん減ってゆく。米国は今でこそ日本に牛肉を買えといっているが、やがて頼んでも売ってくれなくなる時代が来ると警告する専門家もいる。

ひるがえって、日本の食糧生産はというと、特に地方では人手不足もあって風前の灯だ。人の手が入らなくなった里は原始の森へと回帰し、人を寄せつけない。このままでは、日本の大地は都会と原始林の二極に分化してしまう。原始の森は人間に凶暴な牙を剥くことがある。森は文明を守り育ててきたが、その森とは人間が守り管理する森のことだ。従来政治問題であった食糧問題は、いまや地球環境問題なのである。

佐藤洋一郎、現代のことば（京都新聞 2006・10・25）